

サウディアラビア・日本の貿易関係の経済分析

DR.ハーリド・アルハムディー／DR.ハーリド・アルダヒール

(要旨)

日本は、過去30年間(1970-1999)にわたり、サウディアラビア王国と貿易交流で最も強く結ばれた国である。この関係を強化して来たのが、様々な経済協定であった。本論は両国の貿易関係の分析と研究の基本的な状況につき述べ、それを5部に分けている。第一部はサウディアラビア、日本の経済に焦点をあて、その変化について調べた。第二部では、両国の貿易の時系列的な発展とその期間内における両国の貿易額の変化についてである。第三部は日本からサウディへの輸出入の品目別の分析である。これは輸出入の類型の変化を知ることができる。第四部は、上記の研究の最も重要な点で輸出入の需要傾向につき採用した定型モデルと手法で表示した。同様に第五部では、両国経済に占める貿易発展の影響を分析するために経済指標と、両国の貿易分野に示された経済変数を用いて検討した。

統計を分析して明らかになったことは、日本の工業生産が過去30年間に顕著な発展を遂げたことである。サウディ経済に関しては生産分野で今も成長の過程にある。それにも拘らずサウディアラビアは石油化学の分野で大きな進展を成し遂げた。両国経済は共に物価の安定により80年代の初めから国内総生産で大きな増加を示した。当時、日本経済は国内総生産について連続して大きな伸長を実現した。サウディ経済は、1990年に経済成長の顕著な低迷を経験したが再び成長し、この何年かは平均的な成長を実現している。

研究が明らかにしたのは、国内総生産(GNP)におけるサウディ国民の個人所得平均が1980年から1997年において平均値で減少したことであり、これに対して同期間に日本ではその個人所得平均が増加したことである。この結論は日本人個人の生計のレベルがサウディ人個人に比較して良かったことになる。

研究はまた、日本からサウディへの輸出と輸入の実績の間に直接的な相互関連があることを明白にした。それは日本からサウディへの輸入に対する支出予算の原資の一部が日本への輸出収入にあることだった、日本とのサウディアラビア貿易額の関係は、過去30年間にわたり黒字が続いて来ている。明らかなのは、サウディの日本との黒字貿易額は、サウディの世界各国との貿易状況を相殺しているのである。同様にサウディの貿易額の黒字は過去の調査した期間全般にわたり、日本から支払われた額により支えられている。だが日本経済は最近の5年間、貿易額が伸び悩んでいる。

経済成長率について、研究結果は、サウディの国内総生産の平均が、過去、30年間に日本の平均成長率を上回ったことを示した。サウディの輸出は、平均成長率で日本のそれを超えている。同様にサウディの輸入の平均成長率は、

日本の輸入平均率を上回った。同じく貿易全体の成長率も日本のそれを超えていた。サウディアラビアにおける人口の伸び率平均は、日本と比較して、その期間に大きな伸びを記録している。また生活費の伸び率は、両国共に類似していた。

最近の4年間において、日本からサウデイへ輸出された品目の筆頭を占めるのは、自動車各種、輸送機、建機である。一方、サウデイから日本へされたのは、原油と石油化学製品の2品目に集中される。ここでサウデイから日本への総輸出の94.9%に上るのがこの中間製品であることが判る。

本研究で時系列のモデルから得たことは、輸入の需要とサウデイの輸出の間に相関関係が存在し、それは両国の貿易の変化に帰還（フィードバック）するという影響が見られたことである。

サウデイの原油以外での分野が、日本からの輸入品への支出を決める主要因となっていることが明らかとなった。日本からサウデイへ輸入される国内需要の変化幅は少なく需要はそのまま必要なのである。これはサウデイ経済が国外の分野に依存していることであり、その経済の生産力がいまだに弱体であることを意味する。この結果により、経済法則である輸入価格と需要の間に逆関係があることと一致する。そして日本から輸入される品目は殆どが完成品であるのは明らかで、それは日本から輸入された品目の統計分析にも示されている。

最後に日本とサウディアラビアの貿易関係の均衡は、サウデイからの輸出がそれを決定する主要因となっている。というのもサウデイ側にとり益となる日本への貿易額の伸長は、サウデイ輸出品の需要の減少を生むことになりかねない。同様に、サウデイの貿易予算の実行と日本における工業生産量との間にも逆関係が存在するのである。

—以上—